子どもとボランティアの あそびノート

～東日本大震災復興支援からの学び～

東北福祉大学 TOHOKU FUKUSHI UNIVERSITY × Save the Children JAPAN

はじめに

東日本大震災の影響により、地域の公園は津波により浸水したり、仮設住宅が建設されたりするなど、子どもたちの遊び場や居場所は減少しました。さらに仮設住宅敷地内の屋外スペースは駐車場として使われ、子どもたちが外遊びするには危険な環境にありました。しかし、子どもたちにとって、遊ぶことは、身体的発達だけではなく、知的、情緒的、社会的な発達にとっても欠かすことができません。

2011年の夏、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン（以下：SCJ）は宮城県名取市の仮設住宅の談話室を活用した遊び場づくりを始めました。この地域でも、子どもたちが 日常的に遊べる場を必要としていたこと、また地域の人たちと子どもたちが集まり、子どもらしく過ごせる場所づくりの必要性を確認していきたいと考えたためです。活動を始めた当初は、「談話室は誰かの家」だと思っていた子どもたちが多く、「入っていいの？」と聞く子どももいました。しかし、子どもにとって身近な場所で定期活動を継続したことにより、次第に談話室が子どもたちが気軽に立ち寄れる場所となりました。未曾有の大震災を経験した子どもたちが、地域に見守られながら、安心・安全に過ごせる場所を得ることは非常に大切です。

夏休みが終わる頃、団地の自治会長より、学校法人栴檀学園東北福祉大学をご紹介頂き、同大学の学生ボランティアの協力を得て継続的な支援を目指し「子どもの育み支援ボランティア事業」がSCJと同大学の協働事業として2011年9月より始まりました。活動や時間は子どもたちによって決められ、毎週金曜日の夕方4時から1時間半の遊びと学習のプログラムが実施されました。

そして、活動3年目を迎える今年、これまでの私たちの経験を1冊にまとめることにしました。まとめる作業に当たっては、常に子どもたちに寄り添っている学生ボランティアの意見や考えを大切に進めました。全国の多くの遊び場づくりはもちろん、もしまた災害が起こった時に、子どもたちが安心・安全に過ごせる場づくりにお役立て頂くことを願っています。

公益社団法人 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

子どもの権利条約 第31条の尊重

子どもの遊びは、すべての年令の子どもが持つ権利のひとつであり、
子どもの権利条約第31条で規定されています。
私たちは、子どもが持つこの権利を本事業でも尊重しています。

東北福祉大学
TOHOKU FUKUSHI UNIVERSITY

東北福祉大学は「行学一如」を教育理念とし、福祉社会を担う人材を養成しており、その教育方針として「自立（自律）した市民の育成」を掲げ全学的に取り組んでおります。本学では阪神・淡路大震災をきっかけに各地で発生した災害ボランティアについても取り組んでおり、被災地に拠点を置き、大学の特色をいかした活動を行っています。

http://www.tfu.ac.jp

Save the Children
JAPAN

セーブ・ザ・チルドレンは国連に公認された子ども支援の国際ＮＧＯです。世界最大のネットワークのもとに、日本を含めイギリスやアメリカなど30か国のメンバーと約120の国と地域への支援を行っています。子どもたちの生きる・育つ・守られる・参加する「子どもの権利」を実現するために、日本をはじめ世界の子どもたちのために、子どもたちとともに活動しています。

http://www.savechildren.or.jp

※この「あそびノート」は、東北福祉大学の学生ボランティア、ボランティア支援課、SCJスタッフが、実際の活動を振り返る作業を通して、話し合いをしながら共同で執筆をしました。

子どもとボランティアの あそびノート

～東日本大震災復興支援からの学び～

もくじ

はじめに 02

子どもたちと遊ぶ時の「約束」 05

活動の流れを作りましょう 06

安全に遊べるように気をつけること 07

遊び場のレイアウト 08

セーブ・ザ・チルドレンが考える5つの遊び 09

学生が選んだ遊び 17 10

活動を記録する 28

スタッフの声 30

子どもにとって安全な活動をするために 34

地域とのネットワーク形成 36

おわりに 37

制作メンバー（順不同）

東北福祉大学：教職員

生田目学文

佐藤玲於

髙橋俊史

髙橋菜津子

樋口智美

渡辺信也

東北福祉大学：学生

我妻華佳

梅津友理子

及川真奈

三瓶竜太

首藤綾

高橋彩音

セーブ・ザ・チルドレン ジャパン：

阿部里佳子

荒川彩

森郁子

私たちの遊び場（仮設住宅内の談話室）

この仮設住宅には約15世帯が住んでおり、0歳～18歳の約20人の子どもたちが生活しています。10人前後の子どもたちが毎週金曜日に集まっています。

● 子どもの参加人数　のべ 716人 ● 学生の参加人数　のべ 397人
● 活動回数　合計 86回　（2011年9月～2013年12月まで）

本書で使うアイコン

年令を表す

遊びの種類

人数

子どもたちと遊ぶ時の「約束」

私たちの遊び場づくりは、多くのボランティアが参加して運営をしています。ボランティアとして、子どもの遊びを支えるために活動で大切にしていることを話し合いました。約束を作ることで、ボランティアの共通認識をはかり、意識向上をすることができました。私たちの約束は以下の通りです。

- □ 子どもをひとりの「人」として、尊重すること
- □ 子どもの表情にも注意を払いながら、子どもたちの声を聞きもらさないこと
- □ 子どもの話を否定しないで最後まで聞くこと
- □ どんな子どもでも受け入れ平等に接すること
- □ 子どもたちのできることを尊重し、手伝い過ぎず、成長を応援すること
- □ 子どもと話す時は、名前で呼び、目線を合わせること
- □ 笑顔で元気に、しっかりと挨拶をすることを心がけること
- □ 子ども目線で物事をとらえ、大人の考えを押しつけないこと
- □ どんな時も子どもに暴力を振るわないこと
- □ 周りをよく見て事故やケガのないように注意を払い、子どもたちの安全を守ること
- □ 子どもは地域社会で育っていることから、周辺住民との連携を大切にすること
- □ 子どもとの秘密を守ること
- □ 子どもと個人的に連絡をとらないこと
- □ 子どもの命や成長に関わる問題を見聞きした場合は責任者に相談すること

活動の流れを作りましょう

活動の始まりから終わりまでの予定を、みんなが目にする黒板やホワイトボードに記しておくことで、子どもは見通しが立てやすくなり、安心して遊ぶことができます。活動の流れを作る上では子どもたちが自由に選べる時間を設けたり、子どもたちの意見を取り入れつつ進めていくことも大切です。

時間	所要時間	内容	
15:45	0:15	**活動の準備**	p.7、8を参考に準備をし、子どもたちが安心・安全に遊べるようにします。
16:00	1:00	**活動開始〜** **室内外で思い思いの遊びを楽しむ**	学年によって帰宅時間が異なり徐々に子どもたちが集まって来ます。おうちの人が心配しないように一度自宅にランドセルを置いて、「ただいま」と言ってから談話室での活動に参加することになっています。 様々な遊びの中から子どもたちが遊びを選び、お兄さん、お姉さんと過ごします。たとえば、室内ではボードゲーム、宿題を見てもらう子どももいます。屋外ではバドミントンやおにごっこなどを楽しみます。
17:00	0:45	**公園へ出かける**	仮設住宅団地に引っ越してきたばかりの頃は、いつ地震が発生するかわからない不安感から団地内で遊ぶのが中心でしたが、1年が経過した頃から公園へ出かけるようになりました。
17:45	0:15	**おやつ**	子どもたちはこの時間がとっても楽しみのようで、時間まで待ち切れない！ということも。子どもたちにアレルギーがないかどうかや、衛生面に十分注意を払う必要があります。
18:00		**片付け・帰宅**	遊んだ遊具をもとの場所に片付けてから帰宅します。

※冬は日没時間が早いので、17時頃で活動は終了します

安全に遊べるように気をつけること

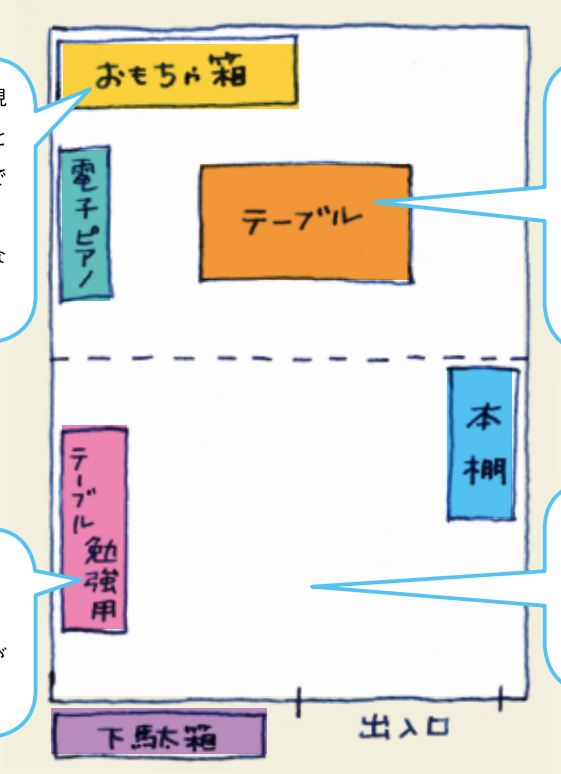
子どもは遊びの天才で、いわゆるおもちゃという物がなくても、なんでも遊び道具にしてどんどん遊びを展開していきます。思いのままにのびのびと遊ぶことは、私たち大人が「ひやっ」としたり、「それはだめ!」と注意する場面が増えることでもあります。子どもたちの年令を考慮しながら遊び場を点検し、まず、安全を確保します。ケガなどをせずに、のびのび遊べる環境づくりが何より大切です。

- □ 掃除機などで、床や子どもの手が届く範囲から尖った物や誤飲につながるような小さな物は取り除く。
- □ 活動で使わない物・子どもに触ってほしくない物はすべて片付ける（別の部屋に移動する、大きな布を使い目隠しするなど）。
- □ 出入口は必要な時に開閉するようにし、遊んでいいところといけないところを視覚的にわかりやすくする。
- □ 大人の目が届かない“死角”がないか確認する。
- □ カーテンがある場合は下部分を高い位置で結ぶ。
- □ ドアに手を挟まないような工夫をする。
- □ 大きな家具などには転倒防止対策をする。
- □ テーブルなどの角にクッションになる物をつける。
- □ コンセントの差し込み口をテープなどで塞ぐ。
- □ トイレ、お風呂などの水回りに、子ども（特に乳幼児）だけで行くことがないようにする。
- □ コーナーを年令別／遊びの種類別で分け、静かな遊びと元気な遊びのスペースを区切り、安全な導線を作る。
- □ 口に入れても安心な素材を選び、子どもが新しいことにチャレンジできるようにする（はちみつクレヨンや小麦粉ねんどの利用など）。

遊び場のレイアウト

私たちの活動場所の例、遊び場づくりのコツ

片付ける場所がわかるように視覚的に文字や絵で示しておくと遊び終わったら子どもが自分で片付けられます。
※危険な物（ハサミやカッターなど）は別に保管しましょう。

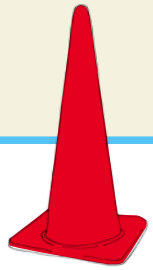


部屋の中心にテーブルをおくことで自然と子どもたちが集まって、思い思いの遊びが始まります。人数が多い場合は隣の部屋にテーブルを増やすこともできます。

周りで友だちが遊んでいても、壁向きにテーブルをおくことで、勉強したい子は集中することができます。

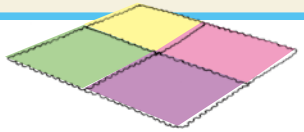
床に柔らかい素材の物を敷くことで、寝転がって本を読んだり、友だちとおしゃべりをしたり、転んだ時の衝撃も和らげます。

あったらいい備品



カラーコーン

外遊びの時に、安全範囲を視覚的に示すことができる



ジョイントマット

転倒時の衝撃を和らげ滑らないようにし、視覚的にスペースを区切る

救急セット

子どもの遊びに切り傷、すり傷はつきものなので、もしもの時のために

音楽プレーヤー・CD

BGMや歌遊びで使用する

安全対策グッズ

家具の角をガードするコンセントの差し込み口を塞ぐ物など

セーブ・ザ・チルドレンが考える5つの遊び

セーブ・ザ・チルドレンは、子どもが主体的に遊びを選べる環境づくりを大切にしています。また、「想像する遊び」「創作する遊び」というような「静」の遊びと、元気に走り回れる「動」の遊びを組み合わせたりすることも大切です。子どもたちが色々な遊びに出合える場を作るため、5つの遊びという考え方、また、次からの「学生が選んだ遊び 17」を参考にしてみて下さい。

体を動かす遊び

体操、サッカー、バレーボール、チームゲームなど

想像する遊び

読み聞かせ、人形遊び、イメージ遊び、ダンス、音楽など

創作する遊び

絵、粘土、コラージュ、しおりやメッセージカード作りなど

手をつかった遊び

パズル、積み木、ブロック、ボードゲームなど

コミュニケーションを用いる遊び

まねっこ遊び、ストーリーテリング、会話、討論会など

Save the Children JAPAN

学生が選んだ遊び17

子どもたちに人気のあった遊びを
子どもと一緒に活動してきた学生が選びました！

選んだポイント

① 震災後で道具が限られていてもできる遊び
② 場所が限られていても工夫すればできる遊び
③ 年令差があってもできる遊び

あそびノートには学生の「これはよかった」や「次回の活動でできたらいいね」という、子どもたちとの創意工夫がたくさん盛り込まれています。

みんなで楽しく遊ぶため、私たちはこんなことをしています

1 「子どもたちと簡単なルールを作る！」

2 「声かけをしたり、ポスターにしたり、
みんなで決めたルールを守るようにする！！」

屋外遊びの時は、こんなことに注意をしています

1 「靴をちゃんと履くこと」
裸足やサンダルはケガにつながります。

2 「車に注意すること」
屋外遊びは仮設住宅居住者用の駐車場で行うため、
出入りする車や駐車してある車に十分気をつけます。

屋内遊びの時は、こんなことに注意をしています

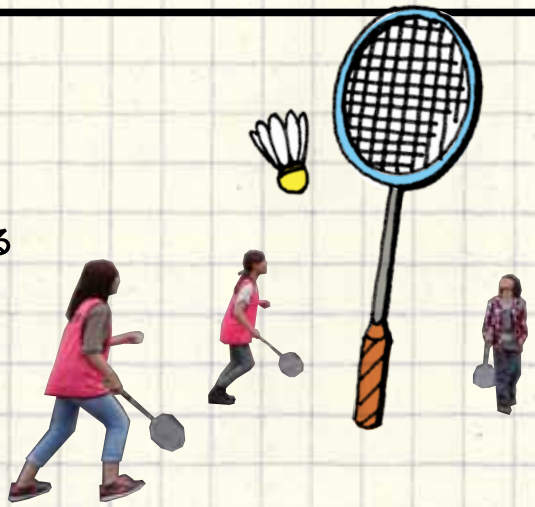
1 「小さい子は年上のお兄さんやお姉さんとペア」
工作や料理をする時には、未就学児と小学校高学年の子どもをペアにしたり、
グループにしたりすることで活動がスムーズに進むだけではなく、ケガなども防げます。

2 「ボランティアは最低2人で対応」
屋外/屋内で遊びが分かれる場合は、万が一何か起こった時のために
可能な限り2人以上のボランティアを配置します。

#01　バドミントン

+7~　2~

用意するもの：ラケット、シャトル（羽）



遊びかた

① 2つに分けられたコートを必要な面数作る

② ラケットを使ってシャトルを打ち返す

スタッフの動き

【スタッフ数】 2人～

【役割】 ① 一緒にバドミントンを楽しみながら、車が入って来ないか、
またボールが転がってこないかを確認したりと、周囲に注意を配る

② 順番や時間を決めた後、全員が遊べるように配慮する

楽しむコツ

① ダブルスの時は、性別や年令などのバランスに配慮を。

② 一度にたくさんの子どもがバドミントンで遊びたい場合は、チーム戦にし、時間を決めて、
順番待ちを解消！

こんなことに注意！

バドミントンは上ばかりを見がちになるので、車に要注意！

男子も女子も、ネットを使わないラリーが大好き。ただ、ラリーはすぐに飽きてしまうので、1回10分程度の試合に切り替えるといいですよ。

SCJからひとこと

手軽に体を動かせるバドミントンは人気ですが、道具の管理や違った目的に使用されることへの懸念も。まずは、子どもたちとのルール作りから始めてみては？

#02　ボール遊び

+5~　2~

用意するもの：ボール

※ビニール製がおすすめです！

遊びかた

ボールを選び、ルールを決めてスタート！

※どんなボール遊びでもボール選び（硬さ、大きさなど）が重要です。硬いボールは車や人に当たった時の衝撃が大きいので注意しましょう！

スタッフの動き

【スタッフ数】 2人～

【役割】 ① ボールが道路に出ないように、1人は道路側に立つ
② 低学年の子どもがいる場合にはボランティアが入りバランスをとる

楽しむコツ

① チーム戦の場合は、1チーム3人程度が盛り上がります。
② 男女混合のチームにすると、性別を超えて遊べます。

こんなことに注意！

道路や川が近い時は、遠くに投げ過ぎないように注意！

高学年になるとエネルギーがありあまっているので、限られたスペースでも全身を使えるキャッチボールが人気です！

SCJからひとこと

物や人に当たることから、ボール遊びを懸念する声も。しかし、どんなボールを選ぶかで防ぐこともできます。また、自治会と相談して遊ぶ時間を決めるのもひとつの解決策です。

#03　なわとび

+5~　1~10

用意するもの：長縄、短縄

遊びかた

① 縄を準備し、何跳びをするかといったルールを決める

② ルールを守りながら、なわとびを楽しむ

※みんなのなわとびルール：
上手に跳べない子がいる時は跳べない子を真ん中にして、みんなで楽しめるように遊ぶ

スタッフの動き

【スタッフ数】 1人～（子どもとふたりきりにならない場所を選ぶ）

【役割】 ① 周囲に注意を払いながら、子どもたちと楽しむ

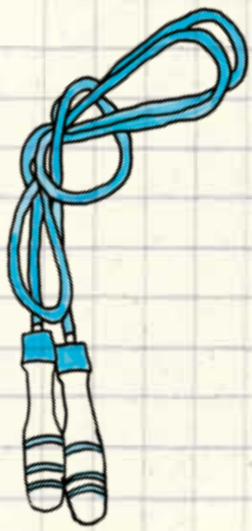
② なわとびカードなどを作り、達成した子にシールやスタンプを押す

楽しむコツ

跳ぶタイミングに合った歌を用意したり、様々な年令に合わせたルールを設けることで、みんなで遊ぶことができます。

こんなことに注意！

短縄をする時は、縄の近くにいる子どもに当たると危ないので周りに他の子どもがいないか確認してから遊びましょう。



協力して遊べる大縄。自分に挑戦できるひとり跳び。みんなで盛り上がれるにょろにょろヘビ。誰でも楽しめますね！

#04　自転車・一輪車

+7~　1~

用意するもの：自転車、一輪車

遊びかた

① 乗る場所を決める

② 一輪車の台数が少ない場合は、1人が乗れる時間を決める
（15分程度を目安に交替しました）

③ 事故を未然に防ぐために、交通ルールを決め、自由に遊ぶ
※みんなの交通ルール：一方通行で遊ぶ

スタッフの動き

【スタッフ数】 1人～（子どもとふたりきりにならない場所を選ぶ）

【役割】 ① 乗れない子どもの補助をする
② 乗れるスタッフは手本になる乗り方を見せ、「みんなの交通ルール」の声かけをする

楽しむコツ

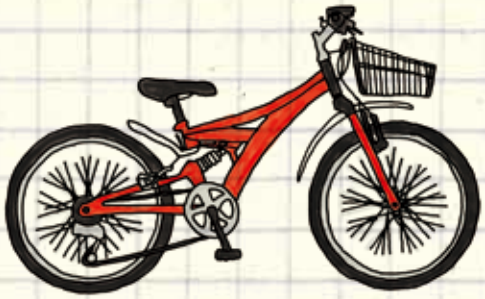
① 一輪車の練習は、手すりがある場所を使って乗れるようになってから他の子どもたちと一緒に遊ぶようにしています。

② 自転車、一輪車は、交通ルールを守らないと事故につながってしまいます。
みんなでルールの確認をしましょう！

こんなことに注意！

敷地の外へ出る時は、子ども自身が注意する必要があります。
ポスターを作り周知しては？

子どもの人数と自転車や一輪車の台数が合わない時は、順番制にして楽しんでいます。



#05　おにごっこ（田んぼの田）

+7~　5~10

用意するもの：地面に線を描く道具（チョークなど）

遊びかた

① 地面に田んぼの「田」の字を描き、オニを決める
② オニは「オニの通るみち」（下の絵を参照）に入り、他の人はスタート地点のマスに入る
③ オニ以外の人は「オニの通るみち」を避けながら、オニが決めた回数の分だけ、一方方向に回る
④ オニは「オニの通るみち」の中で、マスを飛び越えようとする人を捕まえる
⑤ オニにタッチされた人は、負け！　「田」の字の枠の外で待つ
⑥ 最後までオニにタッチされずにマスを回り切れた人の勝ち！
⑦ 次のオニは外で待っている人でじゃんけん

スタッフの動き

【スタッフ数】 2人～

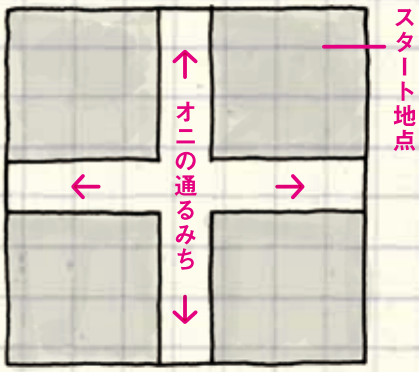
【役割】 なるべく2人体制で、1人は子どもたちと一緒に走り回り、
もう1人は枠の外で安全確認や、数を数えたりして盛り上げる

楽しむコツ

人数によってオニを増やしたり、枠を4マスから6マスにすると楽しめます。

こんなことに注意！

マスにたくさんの子どもが集まると体の大きな子が小さな子を押し出してしまうことも…。
また、盛り上がってくると次のマスに人がいるかを確認せずに突っ走ってくるので、
空いているマスに子どもを誘導するといいでしょう。



#06　おにごっこ（色おに）

+5~　5~

用意するもの：特になし

※色が限られてくるので、何色かのポールを用意するともっと楽しめます！

遊びかた

① オニを決める

② オニは色の名前をひとつ言い、
その他の人はその色の物を探し、それにタッチする

③ 色にタッチする前にオニに捕まった人が次のオニになる

スタッフの動き

【スタッフ数】 3人～

【役割】 範囲を決めるなどして、ケガをしないように周りをよく見る配慮をする

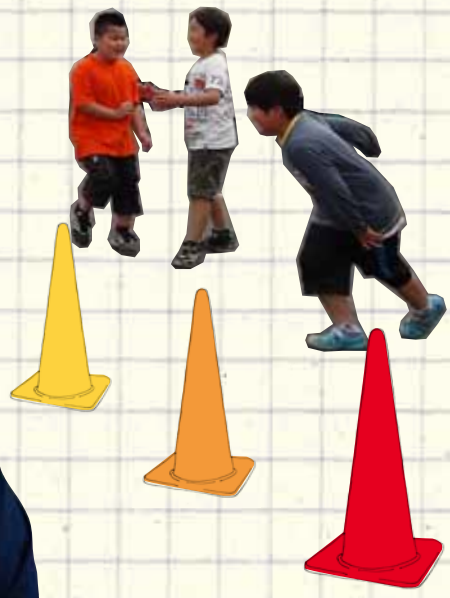
楽しむコツ

① チーム戦の場合は、1チーム3人程度が盛り上がります。

② 男女混合のチームにすると、性別を超えて遊べます。

こんなことに注意！

外で走る活動では、特に車に注意！



幅広い年令の男女が一緒に遊べます。子どもの人数が多いほど、盛り上がれますよ！

#07　自然と遊ぶ

+5~　1~

用意するもの：虫かご、虫取り網など

※昆虫や草花図鑑があるとさらに楽しくなります！

遊びかた

① 公園などの自然が豊かな場所へ行き、
　見つけた昆虫を捕まえる

② 花を摘み、花飾りなどを作る

スタッフの動き

【スタッフ数】 2人～

【役割】 ① 子どもたちが様々な昆虫や草花に興味を持てるように
「これは○○の花だね」などの声かけをする

② 草花で何かを作る時や遊ぶ時は、作り方や遊び方がわからない子どもをサポートする

楽しむコツ

① 図鑑を持って行って、今まで知らなかった昆虫や草花を一緒に学ぶのもいいですね。

② 昆虫を捕まえて観察しやすいように虫かごを持参して遊びに出かけるのがおすすめです。

③ 昆虫を触れない子どもでも、虫かご越しに観察するのが好きな子もいます。

こんなことに注意！

ハチなどの危ない虫に気をつけましょう！
遠くに出かけるなら保護者に連絡を。

SCJから ひとこと

子どもたちは時として昆虫に対して、とても残酷。これは命の尊さについて学ぶ機会とも考えられます。むやみに止めるのではなく気持ちを代弁しながら見守りましょう。

様々な種類の昆虫を捕まえて飼育したり、草花で花飾りを作ったりして遊びます。子どもたちは自然が大好き！

#08　雪遊び

+5~　2~

用意するもの：手袋、ぬれにくい服、長靴など

遊びかた

① **雪合戦**（人数が多い時はチーム戦に）

② **テーマを決めた雪遊びなど**
（例：巨大雪だるまを作ろう！など）

スタッフの動き

【スタッフ数】 1人～（子どもとふたりきりにならない場所を選ぶ）

【役割】 ① 一緒に雪遊びを楽しむ

② じっとしていると体が冷えてしまうので、体を動かせるように周りを見たり、寒そうにしている子どもがいたら室内で休憩をとるように声かけをする

楽しむコツ

① 休憩を設け、子どもたちの様子を確認しながら進めます。

② 時間制にし、間間に作戦会議をしたり、チーム替えするのもポイント！

③ チームがわかるように色の異なるリボンなどを腕に結ぶといいかもしれません。

こんなことに注意！

異年令の子どもたちが一緒に雪合戦する時は、低学年の子どもも楽しめるルールや環境づくりを心がけると良いかもしれません。

雪遊びは、雪合戦から雪だるま作りまで、様々。遊びが終わった後に体を温められるような暖房器具や飲み物があるといいですね！

SCJからひとこと

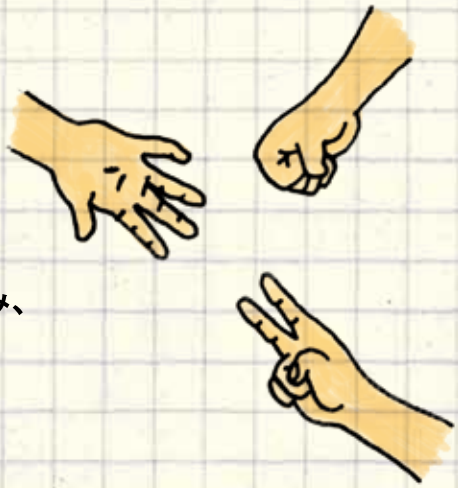
事前に周知できるようであれば、手袋やぬれにくい服、長靴を履いて来るようにお知らせできるといいですね。

#09　グリコ

+5~　2~5

用意するもの：特になし

※じゃんけんの絵カードを作るための紙・ペンがあるといいです。



遊びかた

① ゴールを決める　② じゃんけんをする

③ グーで勝ったら、グ・リ・コと3歩進み、
チョキで勝ったら、チ・ョ・コ・レ・イ・トと6歩進み、
パーで勝ったら、パ・イ・ナ・ッ・プ・ルと6歩進む

スタッフの動き

【スタッフ数】 1人～（子どもとふたりきりにならない場所を選ぶ）

【役割】 スタッフは、ゲームを盛り上げながら全体の動きを見守る

楽しむコツ

① 遠くに離れても見えるようにじゃんけんの絵カードがあるとわかりやすく、
子どもたちと絵カードを作るのも楽しいです。

② じゃんけんが見えるようにできるだけ直線距離でするといいですよ。

③ パーで勝ったら、パ・ンと2歩進むなど、子どもたちと一緒に考えてみては？

こんなことに注意！

地面がぬかるんでいたり、落ち葉や障害物があると踏み出した時に滑ったり、着地した時にバランスを崩してケガをしてしまうので注意をする必要があります。

じゃんけんができれば誰でも遊べる簡単な遊びです。場所が狭いとすぐにゴールしてしまうので、駐車場の端から端まで広い範囲で遊ぶと楽しいですよ。

#10　ピアノ

+5~　1~

用意するもの：ピアノ、鍵盤ハーモニカ、楽譜、音楽の教科書など

遊びかた

① 1人が演奏できる時間など、ルールを決める

② 順番に弾く

※みんなのピアノルール：1人1曲、または1人15分

スタッフの動き

【スタッフ数】 2人～

【役割】 スタッフは交替のタイミングを知らせ、
スタッフが弾ける場合は、子どもと一緒に楽しむ

楽しむコツ

① すでにある楽譜を弾くだけではなく、子どもたちが自由に歌詞を作り、オリジナルの曲を作るとおもしろいですよ！

② すでにある曲にオリジナルの歌詞をつけても楽しいです。

こんなことに注意！

ピアノの音量が大きくなって住民の方に注意を受けたこともあったので、音量が大きくなっている場合は、音量を下げるようながしています。

楽譜がある時は、1人15分程度。ない時は、満足するまで弾いてもそれほど時間はかかりません。弾ける子が弾けない子に教えている姿も！

#11　人形遊び

+0~　2~

用意するもの：人形、パペットなど

遊びかた

① 人形を選ぶ

② ストーリーを考える

③ 役になりきる

※ストーリーを自分たちで考えることで、想像力が膨らみ、より楽しくなる。
また、子どもたちがどのようなことを考えているのかなどを
人形遊びを通して理解することができる。

スタッフの動き

【スタッフ数】 1人～（子どもとふたりきりにならない場所を選ぶ）

【役割】 スタッフは子どもが演じる役の脇役として演じる

楽しむコツ

① 主人公以外に、2～3の役が他にいると話が膨らみます。

② 人形を使うと感情表現しやすくなるので、普段、感情を
あまり表に出さない子どもとの遊びにも役立ちます。

こんなことに注意！

人形が少ない場合、年令に合わせて身近な物（ペットボトルやお菓子の箱など）を使い自分たちで作ると、さらに人形遊びの幅が広がります。

オリジナルの話を作ったり、人形が足りない時には手でキツネなどを作って参加するのも楽しいですよ。

SCJからひとこと

「想像する遊び」は絵本や紙芝居の世界に登場する人物の気持ちやストーリーを自由に想像する楽しみを体験できます。人形遊びもそのひとつです。

#12　ボードゲーム（山崩し）

+7~　2~

用意するもの：オセロ、将棋など

遊びかた

① ボードの上にコマを、ひとつの山のように積み上げる

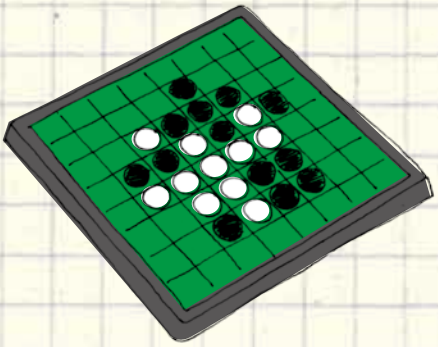
② 順番を決めて、コマの山からコマを引き抜く
（その時にコマ同士がぶつかったり、ボードに当たったりして音が鳴ってしまったら次の人にバトンタッチ！）

③ 音が鳴らないまま、コマをボードの外に出すことができると
自分のコマになり、コマの多い人が勝ち！！
（コマを移動させる時に使えるのは、人差し指だけと決めておくといいでしょう）

スタッフの動き

【スタッフ数】 1人～（子どもとふたりきりにならない場所を選ぶ）

【役割】 子どもたちが提案するルールに合わせて遊ぶ



楽しむコツ

① 子どもは4人ほどの人数だとより楽しめます。

② トーナメント戦をしてみるのもおすすめですよ！

こんなことに注意！

小さなコマは誤飲の原因になるので、未就学の子どもがいる場合は注意を払う必要があります。

ボードゲームを使った「山崩し」が大人気！ 子どもたちからは、よくルールの提案があるので、そのルールに合わせて楽しみます。

SCJからひとこと

「手を使った遊び」は、ブロックや積み木、パズルなどを用い、何かを作り出し、課題を乗り越えたことで、達成感や自信を高めることにつながります。

#13　料理

+7~　5~

用意するもの：食材、フォーク、皿（アルミホイルやラップなどもOK）、石鹸（消毒液でも良い）
ウェットティッシュ

遊びかた

① 何を作るかをみんなで話し合う　② 準備や約束ごとを決める
③ グループを作る　④ 料理を作る　⑤ 食べる　⑥ 片付ける

スタッフの動き

【スタッフ数】 3人～

【役割】 ① 刃物や火の取り扱いに十分注意し、各グループを回って、アドバイスをする
② 子どもたちが作りやすいように、必要に応じて見本を作る
③ 上手にできなくても、それまでの過程を楽しむことをうながす

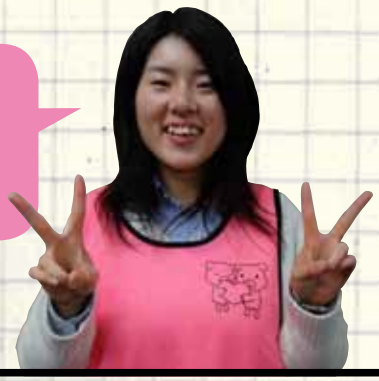
楽しむコツ

① 献立は、子どもたちに聞くことで、自主的に関わることができるようになります。
料理をする日の前に子どもたちと決めるといいですね。
② 火や刃物など危険な物を使うので、みんなでルールを決めて紙に書くといいです。
③ ひとつのことを成し遂げる達成感が得られます。
ここで学んだことを家庭でのお手伝いにいかせるようになります。

こんなことに注意！

保護者へ事前に連絡を入れておくと良いです。
食物アレルギーがある子どもや食中毒には注意しましょう。
手洗いを徹底し、アレルギーのある子どもの席を配慮します。

年令に配慮してグループを分けると、子どもたち同士の交流が増えていいですよ。



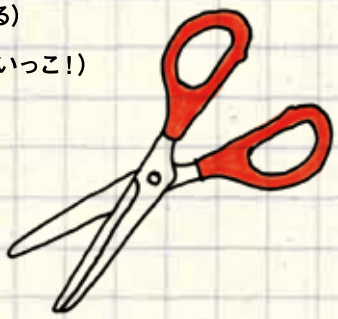
#14　工作

+5~　2~

用意するもの：紙、ペン、クレヨン、色鉛筆、はさみ、テープ、ノリなど

遊びかた

① **作る物を決める**（季節に応じた物や子どもたちの希望に合わせる）
② **汚れてもいいように新聞紙、雑巾、工作板を用意する**
③ **作り方を説明する**（口頭で伝わりにくい場合は、紙に書いたり絵を添える）
④ **作る**（みんなで楽しく安全に気をつけながら）　⑤ **飾る**（みんなで見せ合いっこ！）



スタッフの動き

【スタッフ数】 2人～

【役割】 ① 子どもたちに作り方を説明する
② 作り方がわからず困っている子どもたちを手伝う

楽しむコツ

① 作った後に、飾ったり展示したりすると他の人にも見てもらえ、お互いのいいところも発見できるのでおすすめです。
② 短い時間で作れるものを選ぶと達成感が得られます。また、子どもの年令に合わせて変化をつけるとより楽しいですよ。

こんなことに注意！

スタッフが考えていたことと子どもたちがやりたいことが必ずしも一致するとは限らないので、工作をする前に子どもたちに何を作ってみたいかを聞いてみるといいでしょう。

創造力豊かな子どもたちは、あっと驚く作品を作ってくれます。子どもたちと一緒に学生も夢中になることも！

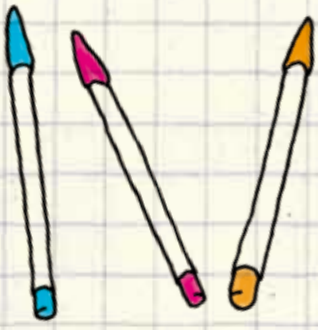
SCJからひとこと

「創作する遊び」では、創作活動を通して、自分自身の感情や考えを表現する方法に出合えます。作品に共感してもらったり、褒められたりすることで子どもたちも喜びを感じられます。

#15　おえかき

+3~　1~

用意するもの：紙、ペン、新聞紙、クレヨン、色鉛筆、水性ペンなど



遊びかた

① 紙とペンを準備する

② 自由に描く

スタッフの動き

【スタッフ数】 1人～（子どもとふたりきりにならない場所を選ぶ）

【役割】 ① 一緒におえかき

② 描いた絵について「これ、なあに?」と質問をし、「楽しい!」の幅を広げる

③ ほめる!

楽しむコツ

① 模造紙などの大判の用紙を使うことで遊びに変化をつけられます。

② 数人で大きな作品を制作しても楽しいですね！

③ ペンや紙を変えるだけで、また違った絵を描けるかもしれません。

こんなことに注意！

ペンを使うことでテーブルや壁、服が汚れてしまうので、声をかけ、汚れてもいいように新聞紙やビニールでカバーするといいでしょう。服が汚れるとわかっている時は、事前にお知らせし、汚れてもいい服で来てもらうようにします。

理想や創造力を膨らませて描く子も。私たちには考えつかない絵や色使いに驚かされます！

SCJからひとこと

乳幼児には、色が出やすい道具や口に入れても大丈夫な原料（はちみつなど）でできたクレヨンを用意すると安心して一緒におえかきができますね。

#16　ポータブルゲーム機

+7~　1~

用意するもの：DSなどのポータブルゲーム機

遊びかた

ゲームで遊ぶ（1人でも複数でも）

スタッフの動き

【スタッフ数】 1人～（子どもとふたりきりにならない場所を選ぶ）

【役割】 ① 声をかけ休憩をうながす

② 時には、ゲーム機以外に夢中になれる遊びを一緒に探す

楽しむコツ

時々声をかけることで、決めた時間になった時の
気持ちの切り替えがうまくできるようになります。

こんなことに注意！

色々な遊びに出合えるように時間
などルールを決めて行いましょう。

SCJから ひとこと

「ゲーム機を持って来ない」というルールを作ったこともありますが、家でひとりでゲームするのとは違った楽しさがあるようです。みんなで遊ぶ楽しさを共有できるルール作りが大切ですね。

男の子に人気で、ひとりで遊ぶイメージがありますが、3人くらい集まり対戦ゲームを楽しんだり、互いに教え合う姿も。

#17　読書

用意するもの：マンガ本、絵本、小説など

遊びかた

① 好きな絵本・本を選ぶ
② 音読したり、黙読したりする
③ 自分で物語のストーリーを考えて楽しむ

スタッフの動き

【スタッフ数】 1人～（子どもとふたりきりにならない場所を選ぶ）
【役割】 年令によって読み手や聞き手の役割を使い分ける

楽しむコツ

たくさんの種類の本が準備できると選択の幅が広がります。

こんなことに注意！

あらかじめ壊れやすい部分には子どもたちとテープなどで補強しておくと長持ち！

SCJからひとこと

生活環境の変化に伴い、子どもの遊びも変化します。以前より読書する子は減りましたが、状態や心境に合わせ子ども自身が遊びを選択できるようにしましょう。

引っ越してきたばかりの頃は、本やマンガを読んで過ごす子どもの姿がよく見られました。

活動を記録する

どうして記録するの？

なぜ、記録は必要？記録がたくさん集まった時、それはどんな意味があるの？どのように役に立つ？など。活動を記録する意義を学生ボランティアと話し合い、以下の4つのことが見えてきました。

1. **活動に関わる関係者へ活動や子どもの様子について報告し、連絡事項も含め情報をボランティアとスタッフ間で共有するため**
2. **活動内容、自分と子ども、自分と地域との関わり方を振り返ることでその時には気づけなかった言動を客観的にとらえそれらを次の活動の糧とするため**
3. **文章にすることによって、自分自身の考えや感情をかみ砕き吸収するため**
4. **活動の初歩的なことであったり、活動での約束ごとを適宜確認し、忘れないようにするため**

どんな記録があったら便利？

私たちの活動には3種類の記録があります。3種類の記録の背景には、3者（学生・大学・SCJ）が一緒に活動していることがあります。授業やサークル、実習などとの両立を考えると固定メンバーでの活動は難しく、新しい学生や久しぶりに参加する学生がスムーズに活動を進めることを目的とした記録（ボラノート）や、大学として保管しておく必要のある記録（ボランティア活動報告書）があります。次のページでは、通称「ボラノート」についてご紹介します。

ボラノート

書く人：学生、大学職員
読む人：学生、大学職員

ボランティア活動報告書

書く人：学生
読む人：大学職員

SCJ 日誌

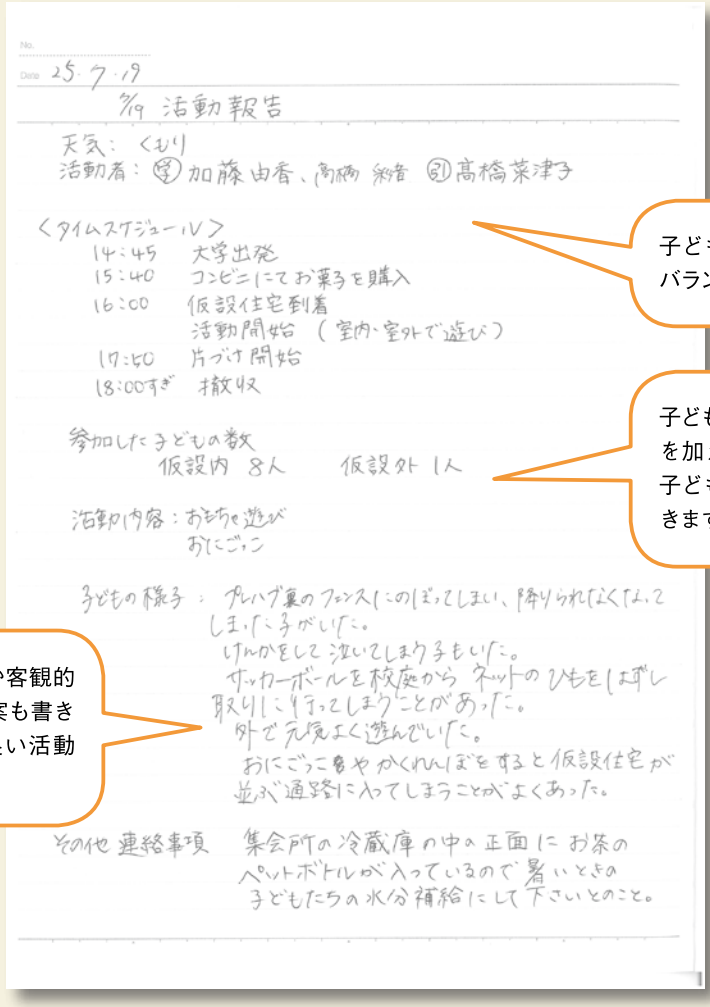
書く人：大学職員
読む人：SCJ

こうして「あそびノート」が作れたのも記録があったからですね

ボランティアノート

通称・ボラノート

ボラノートは、活動に参加したスタッフ（職員、学生ボランティア）が活動終了時に記入し、次回の参加スタッフと時間の流れや遊びの内容、活動の様子、連絡事項を共有するために使われています。



No.
Date 25.7.19

7/19 活動報告

天気：くもり
活動者：(学)加藤由香、高橋 紗音 (院)高橋菜津子

<タイムスケジュール>
14:45 大学出発
15:40 コンビニにてお菓子を購入
16:00 仮設住宅到着
活動開始（室内・室外で遊び）
17:50 片づけ開始
18:00すぎ 撤収

参加した子どもの数
仮設内 8人 仮設外 1人

活動内容：おもちゃで遊び
おにごっこ

子どもの様子：プレハブ裏のフェンスにのぼってしまい、降りられなくなってしまった子がいた。
けんかをして泣いてしまう子もいた。
サッカーボールを校庭からネットのひもをはずし取りにいってしまうことがあった。
外で元気よく遊んでいた。
おにごっこやかくれんぼをすると仮設住宅が並ぶ通路に入ってしまうことがよくあった。

その他 連絡事項 集会所の冷蔵庫の中の正面にお茶のペットボトルが入っているので暑いときの子どもたちの水分補給にして下さいとのこと。

子どもとスタッフの人数のバランスを確認できます。

子どもの年令、性別の記録を加えると、参加している子どものバランスを確認できます。

どんな活動だったか客観的に振り返り、改善案も書き加えることでより良い活動へとつながります。

記入する時・保管する時のポイント

①誰にでもわかるように具体的に記入

②個人的な内容も書かれているのでボランティア以外には見せないように、大勢の人がいる中では記入しない。記入した後はすぐにボランティア支援課に提出し、保管

こんなことに役立つ

①活動後すぐに書くことができ、次のスタッフに時間差なく活動の様子や注意事項が伝えられること

②過去の活動を遡り参考にすることができること

③子どもたちとスタッフの成長、地域の変化がわかること

スタッフの声

～ 東北福祉大学・学生ボランティア、教職員より ～

私たちが「これくらい大丈夫」と思っていることでも保護者の方にとってはその妥協が心配につながると思うので特に交通ルールには気をつけようと思います。活動を継続して、元気な子どもたちと遊ぶのが楽しみです。個人的に挨拶は大切だと思うので、今は子どもたちよりも先に挨拶していますが、今後は子どもたちから「こんにちは」と言ってくれるようにしたいです。まだ数回しか参加したことがありませんが、全ての活動が楽しく、これからも頑張って続けていきたいです。

我妻　華佳

総合福祉学部
福祉心理学科 1年

梅津　友理子

総合福祉学部
社会福祉学科 1年

私は長期に渡るボランティアはこの活動が初めてでした。初めは緊張していましたが、少しずつ活動にも慣れ、今では私自身も本気になり子どもたちと一緒に遊んでいます。子どもたちは元気が良く、私は毎回この活動を楽しみにしていました。この活動は私にとって常に学びの場でした。子どもたちや、一緒に活動をする仲間達からたくさんのことを学びました。この活動に参加して良かったと改めて思います。

ボランティアを通して、子どもたちの成長の姿を見ることができて良い経験になりました。ボランティアを始めた頃は、なかなか挨拶をしてくれず、震災の影響が見受けられるのかなと感じました。距離を縮めることができませんでしたが、活動を続けていく中で子どもたちから話しかけてくれるようになり、距離が縮められたのかなと嬉しくなりました。仮設住宅という厳しい環境の中で適応していく子どもたちとともに、自分も成長できました。

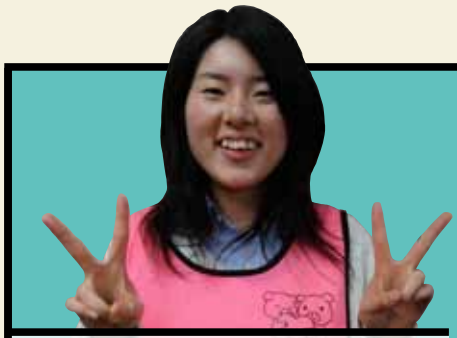
及川　真奈

総合福祉学部
福祉心理学科 4年

この活動は、毎回毎回がとても楽しみでした。そして、子どもたちとおにごっこやかくれんぼなど様々な遊びをする中で、毎回毎回子どもたちの新たな一面を発見することができ、教員を目指している私にとって遊びの大切さを感じることのできた活動でした。活動を重ねていく中で「さんぺい！！」と子どもたちが名前を呼んでくれるようになった時の喜びは忘れられません。今後も遊びの大切さを忘れずに将来の夢を目指していきたいです。

三瓶　竜太

総合福祉学部
社会福祉学科 3年



首藤　綾

総合福祉学部
福祉心理学科 4年

この活動は、最初は緊張し、関わり方もぎこちなく、子どもたちからも警戒されてしまいました。しかし、活動の参加回数が増える中で、たくさんの遊びを通して徐々に打ち解けることができました。最近では年上の子が年下の子を気遣って遊びを工夫する優しい姿も見られ、子どもたちの成長を実感し、子どもたちからも様々なことを教えてもらっていることに気づきました。子どもたちとともに私もより成長していけたらと改めて思いました。

子どもたちが笑顔で自分たちを受け入れてくれること、ありがたいことだなと強く思います。活動の中で彼らを怒らせてしまったり泣かせてしまったりしたこともありました。そういったことも含めて、彼らと同じ時間を過ごせたことは私にとって大切な思い出であり、忘れることはできません。彼らも日々成長していますが、私自身も彼らによって成長させてもらっています。子どもたち・親御さん、地域の方々に感謝です。

高橋　彩音

総合福祉学部
社会教育学科 2年

小野寺　萌

総合福祉学部
社会教育学科 4年

約半年間の「あそびノート」の制作を振り返ると、私自身ボランティアを通して何かを「与えた」というよりも、子どもたちに「与えてもらった」ことのほうが多かったと感じています。子どもたちとの関わりを通して「ボランティアの意義とは何か」「復興に向けて今自分には何ができるか」について考える機会が増え、これは私自身改めて震災と向き合っていこうと決心するきっかけとなりました。セーブ・ザ・チルドレンの皆さん、そしてボランティア支援課の皆さん、半年間本当にありがとうございました。

佐藤　玲於

学生生活支援センター
ボランティア支援課

子どもの育み支援ボランティア事業の活動に参加してみて、まず第一に「子どもたちが非常に元気である」という印象を受けました。それは談話室での室内活動や公園などの室外活動をはじめ、どの場面でも子どもたちが笑顔で楽しそうに学生たちと活動している様子を見たからです。そして、子どもたちが元気良く、笑顔で活動しているのは、活動に参加している学生たちが子どもたちのことを考えて、接しているからではないかと思います。これからも学生たちとともに、子どもたちと交流を深めていき、子どもたちの成長を見ていきたいと思いました。

この活動には何度も参加する学生が多くいますが、それは子どもたちとのふれあいにやりがいを感じているからに他なりません。子どもたちの思いをくみ取ること、疑問を一緒に整理することで自信へとつながることが子どもたちの表情からわかります。私たちの役割は、子どもたちの希望や思考を押し止めないようにすることだと思います。そのためには、子どもたちに寄り添い、言葉や態度に敏感になることが大切だと感じました。私たちにできることは少ないですが、この活動を継続的に行うことで、子どもたちの笑顔が増えればと思っています。

髙橋　菜津子

教務部教務課

髙橋　俊史

情報福祉マネジメント学科

この活動で大変なことは、子どもたちと勉強をすることもそうですが、子どもたちと遊ぶことも大変だったと思っています。仮設という限られたスペースで、いかに楽しく遊ぶのかを考えるには、大人も本気になって遊ぶ気持ちを持たなければ、楽しく遊ぶことはできないと思います。そして、子どもが遊びに夢中になり、危ないことをしてしまいそうな時に、他人である私たちが子どもを怒ることを認めてくれる親や大人がいることで、子どもたちと一緒に安全かつ楽しく活動ができるのだと強く感じています。

学生ボランティアと一緒に活動に参加するようなり、震災直後に出会った子どもたちは遊びたいのに遊べないなど何かを我慢していました。学生に普段言えないわがままを言ったり困らせることをしてみたりなど。それが今では継続して参加している学生の名前を覚え、年下の子を考えながら遊んでいたり、安全に遊ぶためのルールについてちゃんと聞いてくれます。これは子どもたちが学生を信頼して遊べている証拠であり、継続して活動に参加している学生の原動力にもなっているのだと感じます。これからも子どもたちの成長を見守っていきたいと思います。

樋口　智美

学生生活支援センター
ボランティア支援課

渡辺　信也

学生生活支援センター
ボランティア支援課

東日本大震災直後から名取市内の各避難所や災害ボランティアセンターでお手伝いや子どもの遊び相手の活動を行いました。いつもの町並が一変し、なぎ倒された住宅や船が道路に転がり、非日常的な姿がありました。その中でも子どもたちは居場所を見つけようと、初めて会った学生ボランティアと兄弟のように接し、もっと一緒にいてほしいという気持ちを一生懸命出している子どもたちに感銘し、子どものための継続した活動ができるようコーディネートに力を入れました。この活動に参加し、色々な方と出会い、そこから多くのことを学びました。「継続は力なり」これをモットーに今後も活動に励みます。

子どもにとって安全な活動をするために

私たちは、子どもたちとの活動を安全なものにするために、様々なことに注意を払わなければなりません。また、そのための事前準備が大切だと考えています。

緊急時の対応：

たとえば、活動中にケガや事故、または災害が発生するなどの緊急時の対応について、想定・準備をしておくことが大切です。予め誰に報告し、誰が決定し、どのような対応をとるのかなど、活動関係者が活動に際してきちんと理解しておく必要があります。

予防的な努力：

セーブ・ザ・チルドレンは、安全な活動実施のために、「子どもの保護に関する行動規範」（p.35参照）を定めています。行動規範は、不適切と考えられる行為を、あらかじめ関係スタッフやボランティアと確認するために使われます。子どもにとって安全な場をつくるため、当たり前とも思われる事項（暴力を振るわない、わいせつな行為をしてはならないなど）に加え、活動内のリスク軽減のために配慮すべき事項も記載されています。子ども支援に携わる者として、子どもの主体的な活動を支え、また暴力や搾取などから子どもを守るための予防的な取り組みです。

報告制度の設置：

行動規範を守らない、子どもを傷つける言動などがあった場合、または起こりそうな場合に気軽に相談できる制度を整えておくことが大切です。可能であれば2名の相談窓口（できれば男女1名ずつ）を決め、参加スタッフ・ボランティアへ事前周知をしておくことが重要です。また、報告を受けた後の対応についても明確にし、報告者の匿名性を守れるようにすることも不可欠です。

このように、私たちの遊び場づくりの活動では、「子どもの最善の利益」を考慮し、適切で迅速な対応ができるように心がけています。

子どもの保護に関する行動規範

すべての関係者に、以下の行為は許されません。

- 子どもを殴るなど、暴力によって、身体的に傷つけ虐待する
- 子どもにわいせつな行為をすること、またはわいせつな行為をさせる
- 虐待と疑われる扱いをしたり、虐待を誘発しかねない状況に子どもを置いたりする
- 攻撃的な言葉を使う、もしくはそれらの行為をほのめかす
- 自宅など他者の目が届かない状況で子どもと長時間過ごす
- 子ども（たち）が不快に感じる、また、不自然に思われる身体的接触をする
- 子どもが自分でできる身の回りの個人的なことを不必要に手伝う
- 子どもの違法もしくは危険で虐待的な行為を見過ごしたり、もしくはそれに加担したりする
- 子どもを侮辱し、自尊心を傷つけ、感情的に虐待する
- 特定の子どもを差別的に扱かったり、えこひいきしたりする
- 活動で接した子どもの個人的な連絡先を聞き、活動以外の場でその子どもと連絡をとる

セーブ・ザ・チルドレンの関係者は、子どもと接する際に以下の点に留意する必要があります。

- 子ども虐待を疑われる状況を回避する方法を理解する
- 子ども虐待を疑われるリスクを最小限にとどめるため、業務や業務場所を想定・管理する
- 他者の目が届かない‘密室’で子ども（たち）と接する状況を極力避ける
- いかなる問題提起や懸念の報告も躊躇させないようなオープンな環境をつくる
- 不適切な行為や虐待を疑われる行為が見逃されないように、各職員が自覚を持つ
- 職員や関係者との接触に当たって問題があった場合に、子どもが被害を訴えやすい環境をつくる
- 子どもの権利、また適切な行為/不適切な行為との判断など、被害に遭った場合の対処法について、子どもたちに十分な知識と意識を育てる

基本的な考え方として、以下は不適切な行為と捉えられます。

- 他者の目の届かないところで、子ども（たち）と長時間過ごす
- 自宅に子どもたちを連れ込むこと、特に他者の目が届かない状況で子どもと接する

Save the Children JAPAN

地域とのネットワーク形成

ネットワークの活用は大きな力を発揮します。震災時には地域協定を結んでいた東北福祉大学がある国見地区の避難所運営や仙台市災害ボランティアセンターの運営など、日頃からのネットワークが役に立った事例もありました。

名取市の仮設住宅支援ボランティア（毎週金曜日）では、定期的に名取市、名取市社会福祉協議会、仮設住宅自治会長へ細部にわたって連絡や報告を行っています。子どもや住民の様子、学生の活動の様子、行政の対応について情報を得て活動にいかすことは、被災地ボランティアにおいて大変重要なことです。

震災直後は数分または、数時間で状況が変化し、それによって現地のニーズは変わってきます。現在は震災時ほど変化しませんが、週単位や月単位で変わってくる情報を早くキャッチすることが重要です。その多くの情報をキャッチするのがコーディネーターの役目となります。

情報のやり取りの内容としては、現在の仮設住宅の様子や子どもたちの様子、各自治体で取り組む復興計画や実施されている内容、各団体でどのような支援やイベントが行われているかの確認、不審者や悪質な団体などの防犯情報など、ボランティア活動者が現地に入りやすく、気持ちよく活動できるようコーディネートするかで被災地からのボランティアへの評価が決まると言えます。また、仮設住宅の住民へアンケートの実施や保護者向けサロンを開催し、仮設住宅の様子、ボランティアへの意見・提案などを聞き、多面的に情報をまとめるように工夫しています。

現在、名取市の仮設住宅におけるボランティア活動は3年が経過しました。活動を行うにあたり、イベントの実施や他団体の受け入れ、勉学の最中で初心者の学生を快く受け入れて頂けているのは、日頃から顔が見える関係づくりと信頼関係があったからだと言えます。また、行政、自治会との連携の重要性も高く、現状の報告や情報の共有などで仮設住宅住民が住みやすい環境づくりもできます。情報を共有することが被災地とボランティア活動者を結び、有意義な活動にするためのコーディネートが重要な役目となっています。

東北福祉大学　学生生活支援センター　ボランティア支援課

おわりに

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンと東北福祉大学が「子どもの育み支援ボランティア事業」を開始して2年半が経ちました。はじめは2つの異なる団体がどのように協働することができるのか、いつどのような頻度で活動するのか、どれだけ続けることができるか、子どもたちのために何をしたらよいのか…。未曾有の大災害によって生じたさまざまな課題について手探りしながら始まったこの取り組みでしたが、時間が経つのは早いもので、今思えば2年半というのも瞬く間です。

ご両親を亡くしたり、家を失ったりした子どもたちにどう接したらよいのかわからぬまま、私自身もボランティアの学生たちも戸惑いの連続でした。毎週金曜日の夕方、遊びと学習のわずか1時間半のプログラムですが、学生たちは子どもたちと接するうちに、子どもたちそれぞれが持つ個性や特徴をつかみ、柔軟に対応していきました。時に感情をあらわにしたり力ずくでわがままを通そうとする子どもたちに、落ち着いて対応する姿が印象的でした。一度参加して子どもたちと親しくなった学生たちがその後2度、3度と繰り返し参加していたのが大きな特徴であったと言えると思います。

東日本大震災から3年が過ぎ、早くも記憶の風化が懸念されるようになりました。こうした取り組みがうまく機能するには、長期的・継続的に子どもたちに関わっていく必要があります。これを可能とするには、子どもたちを取り巻く環境、すなわち家庭、町内会、自治体、そして大学やNPOなど支援団体のネットワークを整えていくことが不可欠でしょう。そのために今回の「あそびノート」としてこれまでの活動を記録に残すことは大きな意義があります。

子どもたちが成長していくにつれて、それに伴う新たな問題も生じると思われます。継続して寄り添っていける、地に足の着いた支援を続けていきたいと考えます。

東北福祉大学
准教授　生田目学文

東北福祉大学
TOHOKU FUKUSHI UNIVERSITY

東北福祉大学 学生生活支援センター ボランティア支援課

〒 981-8522　仙台市青葉区国見 1-8-1
TEL : 022-717-3321　FAX : 022-301-0606
E-mail : volunt@tfu-mail.tfu.ac.jp

Save the Children
JAPAN

公益社団法人 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

〒 101-0047　東京都千代田区内神田 2-8-4　山田ビル 4 階
TEL: 03-6859-6869　http://www.savechildren.or.jp